Human Being

原木野徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｈｕｍａｎ　Ｂｅｉｎｇ

【Ｎコード】

Ｎ３４０４Ｇ

【作者名】

原木野徹也

【あらすじ】

話をするたび、痛々しく、哀しい瞳をする彼。私は彼のことが好きです。だから、ずっと一緒に歩んでいきたいの。ポルノグラフィティさんの歌、ｈｕｍａｎｂｅｉｎｇより考えました。

Ｈｕｍａｎ　Ｂｅｉｎｇ　　（ＰＯＲＮＯ　ＧＲＡＦＦＩＴＴＩ　より）

ＨＲ前の、騒がしい朝の時間。今日のそれは、いつもより幾分かさらに騒がしい。それは、ある噂が出回っている所為からしく、ざわざわとそわそわが混じったような教室は少し耳障りだった。

その噂というのは、このクラスに転校生が来る、といったものだ。男なのか、女なのか。どんな容姿をしているのか。どうしてこの時期なのか。

そのようなことの話題で教室は満たされていた。正直、ＨＲが始まればわかることだから、私にとってはどうでも良い。転校生が来るのかー、なんて頭のどこかで思っていたくらいだ。

それにしても、と私は思う。どうしてみんなはこんなにも周囲の情報を集めるのが上手いのだろう。誰が誰を好きだとか、誰それは付き合っているとか、誰かが別れただとか、あの二人はけんか中だとか、そんな話など、私は聞いたことがなかった。聞いたとしても、誰かが噂話をしているとは思えないほどの大声で話していたのを聞きかじるくらいだ。

今回の噂話も、男子生徒の誰かが職員室で見たところから始まったらしいが、それも今朝の話だろう。この短時間でどうしてこんなにも話が広がるのか。

周りの状況やそんな噂に疎い私には、その辺りがよくわからない。耳を傾ける必要もないと思うのだけど。

始業のチャイムが鳴り、ざわついていた教室が一瞬の喧騒の後に静まり返る。担任が教壇に立つと、みんながそわそわし始めるのがわかった。教師が口を開く。

「今日は転校生を紹介する」

その一言を聞いて、待ってましたと言わんばかりに周りは騒ぎだした。男？　女？　と教師に聞く男子までいる。

「宮本、入って」

教師の呼び掛けに応じて教室に入ってきたのは、全体的に黒い男子だった。別に、機嫌が悪そうだとか黒いオーラを纏っているとかではない。髪が真っ黒、瞳も黒、制服も前の学校の物なのだろう、学ランを着ていて、本当にそのまま真っ黒だったのだ。

特に髪の毛は、このクラスの目がちかちかするほどの男子たちと比べて、自然の色でここまで綺麗なのだと思わせるほどだった。鴉の濡羽色、とでも言うのだろうか。これで男子たちも考えを改めて校則を守ってくれればいいのだけど。もちろん、彼らが今更髪を黒に戻したところで、彼ほどの驚嘆を与えられることはないだろう。おそらく、その美しさは容姿が伴ってこそのものだろうから。

「じゃあ宮本、自己紹介して」

「はい」

教師に言われ、宮本君がまっすぐにこちらを見る。

「初めまして。宮本と言います。霊長類人科に属しているホモサピエンスの一人です。他の生態系の動物に比べると知能は高く、そのため生態系の頂点にいます。ホモサピエンスの中でもそれなりの知能はあると思います。運動能力はそれなりにありますが他の動物と比べれば皆無に等しいです。××××県の××××高校というところから父の転勤などを含めるある事情からこちらに来ました。

今は××××に住んでいます。まだこの辺りのことに詳しくないので、いろいろ教えてもらえると嬉しいです。よろしくお願いします」

すらすらと一度も淀むことなくこれらのことを言いきった彼に、生徒はおろか教師までもが驚いている。けれど、彼がそのあと二カッと満面の笑みで笑ったことから冗談だと認識したのか、一瞬あと、教室は笑いに包まれる。担任が苦笑しながら、そこの空いてる席に、と促し、宮本君はその席、私の隣に腰かけた。

「よろしくね」

という彼の言葉に私は、

「よろしく……」

としか答えられなかった。

「宮本ー。杉田が放課後教科書取りに来いって」

「あー、ありがとう」

彼は一気にクラスになじんだ。話術とでも言うのだろうか、自己紹介同様、彼の話はみんなに受けるらしく、今日転校してきたとは思えないほど、周りに溶け込んでいた。

私とは真逆だな、と思う。すぐ隣から聞こえる笑い声は、どこか遠く感じられた。

「相川さん」

チャイムが鳴り、辺りが静かになったところで宮本君が話しかけてきた。私は何も言うことなく、顔だけ宮本君に向けた。

「教科書、ありがとね」

今更ながらにそういったのは、この時間で今日の授業が終わるからだろう。少し照れくさそうに、綺麗に笑って、なんだか私まで恥ずかしくなった。教科書を見せるためとはいえ、席をくっつける、というのは少し抵抗も、恥ずかしさもあった。まわり全部が離れている中で、この二つの席だけが浮いていたから。

私は首を横に振り、どうってことない、ということを主張する。どうせ、今日だけのことなんだから。

帰りのＨＲも終わり、各々が掃除やら部活やらに散っていく。私は特にすることもないので、図書室にでも寄って帰ろうかと思っていた。ふと、少し先で宮本君が困ったように首を動かしているのが見えた。どうしたのだろう。

「……どうしたの」

聞こえるか聞こえないかくらいの声を、彼は聞き取ってくれたらしく、こちらを見るとほっと安心したような表情を浮かべた。

「ああ、相川さん、ちょうどよかった。これから教科書取りに行こうと思ったんだけど、場所がよくわからなくてさー。道案内、頼んでもいいかな？」

周りにたかっていたクラスメイトはどうしたのだろう、とか、その人たちに聞けばよかったのに、とか思ったけれど、私はいいけど、と言ってうなずくしかできなかった。

「ほんと？ありがとー、助かる。××××室らしいんだけどさぁ、分かる？」

こんなことでウソついてどうするのとか、分からなかったらどうするつもりだったのかとか聞きたかったけれど、私はまた言葉を飲み込んだ。

「うわ……。結構あるなあ」

机に積まれた教科書の山を見て、宮本君は頬をひきつらせた。これを見て手伝わないわけにもいかず、私は上半分の教科書やワークを抱える。取りに行けとだけ言った担任の横暴さが見て取れるような量だった。

「え、あ。ごめん、ありがと！」

私の行動に、宮本君はあわてて残りの教材を抱えると言った。私はただ首を横に振ってそれに答えるだけで、それからは宮本君も何も言わなかった。

教室までそれを運んで、ロッカーに押し込む。ふう、と一息ついて、宮本君が私を見た。

「助かったよ。本当にありがとう、相川さん」

私はまた首を振ってこたえる。ふと、私は今日何回首を振ったのだろうかと考えた。けれど、考えても意味のないことだとすぐにやめた。

教室の鍵を閉めて外に出る。

「相川さんは、どの辺に住んでるの？」

「……××××××」

「えっ、ホントに？　うちも××××××だよ。じゃあ、電車通学？」

「……」

だから嘘をついてどうするんだ。自己紹介で言ってたのは聞いてたよ。そう思いながら今度は首肯でこたえる。

「そっかあ。じゃあ一緒だね。俺も電車通」

あそこから自転車や徒歩で通っている人がいたら褒めてやりたい。

「……今日さ、これから用事あったりする？」

「……図書室に……。本、借りようかと思って」

「相川さん、本読むんだ。どんなの読むの？」

「現代文学なら何でも。古典もたまに読むけど……」

「一緒に行ってもいい？」

「え？」

少し驚いて、宮本君を見上げる。

「俺もさ、意外かもしれないけど本は好きなんだ。どんなのがあるか見てみたいし……、ダメ？」

駄目も何も、それは私が強制することではない。行きたければ行けばいいし、そうでなければ行く必要はない。
私が首を横に振ると、彼は嬉しそうにぱあっと顔を輝かせた。

「あ、これ」

宮本君が一冊の本を手にとって声を上げた。

「これ、家にある。すげえ好きなんだよな」
「私も」

その本のタイトルを見て、思わず声を上げる。

「私もそれ、好きなの。何回も読んで、そのたびに感動してる」

言ってしまって、後からハッとする。宮本君を見れば、少し驚いたように目を開いていた。が、すぐに表情を緩める。

「だよな。主人公のさ、心情の変化の描写の仕方とか、ほんとすごいって」
「そう！　ここのフレーズとか、私すごい好きで」
「××××なのに××××なところとかもいいよな」
「分かる。この本読んだ後に、この作家さんの本読み漁ったもん。文庫なら家にいくつかあるし」

宮本君が優しく笑う。つられて、なんだか楽しくなって、私まで笑ってしまった。それを見て、宮本君が笑ったまま口を開く。

「やっと、笑った」
「え？」
「相川さんなかなか笑わないからさ。笑顔見たいなって朝から思ってたんだ。やっぱり、すごく綺麗に笑うね。印象変わる」

かあっと顔が熱くなる。そんなことを言われたのは初めてだった。
（み……、宮本君って……）

「ねえ、友達になってくれる？」
「トモダチ？」
「うん、そう。こっちに来て初めての友達」
「クラスの……人たちは？」
「まだ、よく分からないかな。仲良くなれるかもしれないし、なれないかもしれない。話はするけど……。そういう人、誰だっているでしょ？」

そういう人は、私にとってはクラスメイト全員だ。こくり、とうなずいて、そうだね、と答える。

「なってくれる？」

私に、断る理由は何もなかった。すごく嬉しかったし、私も今、それを望んでいた。
彼が友達だね、と言って笑うと、私も嬉しくて、自然と笑顔になった。
何故だか胸がツキンと痛んだ。

「あ、見て。夕焼け。すごい綺麗」

宮本君の言葉に窓越しに空を見上げる。西の空が真っ赤に燃えあ

がっていた。それを雲が反射して、下の部分が朱く染まっている。
「……日が暮れるの早くなったね」
「もう寒いし。マフラーないと駄目だな、これ」
「この間までシャツ一枚で十分だったのに」
はあ、と赤くなった手に息を吐く。一瞬温まった手が急激にまた冷やされて、さらに冷たくなったような気がした。
宮本君が私の手に触れる。冷たい、と彼はひと言言った。
「宮本君の手があったかいんだよ」
「いや、これはいくらなんでも冷たいって。あー、でも俺基礎体温高いからなあ。夏とか暑すぎて唸るくらい」
そういって、さらに私の手を包み込むようにぎゅっと握りしめた。
「手、冷えるよ」
「大丈夫。俺、冷やせば冷やすほど熱くなるっていう奇怪な体質してるから」
「なにそれ」
ふふっ、と笑ってしまう。
「相川さん」
「なに？」
「一緒に帰ろっか」
固まる私に、宮本君は笑顔のまま話し続ける。
「どうせ同じ電車だし、同じ地域だし。今日いろいろお世話になっ

たから、送って行くよ。つくころには暗くなってそうだしね。今更別れても、同じ道なんだから」

どう？と首を傾けて訪ねてくる。私がどうこたえるか分かっているような口ぶりで。唐突にそれを裏切ってやりたい気もしたけれど、どちらにせよ駅で一緒になるのだろう。それならばあまり変わらない……気がする。

「……手は離してね」

私はただ、そうとだけ答えた。

宮本君が転校してきて、しばらく経った。彼の周りは相変わらず明るいままで。私がその輪に加わることはなかった。

だからと言って、別に宮本君と話さないわけではない。彼との関係は、出会った当初のままだ。

放課後、私が図書室にいると、いつの間にか彼も隣に座って本を読んでいる。それは私が貸した本だったり、書架から取ってきた本だったり、誰かに借りた漫画だったりと様々だけれど。

そして、駅までの同じ道と、駅からの同じ道を同じように歩く。私の家と彼の家は驚くほど近くにあった。違うのは丁目ぐらいだ。

私の進路補習があったときや委員会のときも同じように待っていた。

そのたびに、クラスや移動教室の時に仲良く話している男子たちはどうしたのかと訊ねたくなる。けれど、いつもそれについては何も言えないまま、最近読んだ本のこと、飼っている猫のことなどの話をしたり、あるいは何も話さないまま並んで歩いたりしている。

私とこんなことをして楽しいのか。何度も訊きそうになった。ク

ラスメイトと話しているときのほうがはるかに楽しそうだから。

そして、今日も同じように二人で帰る道。電車から降りて、家路をゆく。ふと会話が途切れて、二人とも無意識のうちに下を向いて歩いていた。

「……寒いね」

「うん。さすがのおれも……手が冷たい」

彼がそう言うので、コートから出る彼の手にそっと触れてみた。

「あったかいよ」

「俺はこれでも冷たいの！　てか相川さんの手、可哀想なくらい冷たいよ。手袋は？」

「今日は忘れちゃって」

朝、寝坊して慌ててたから、と付け加える。宮本君は私の赤くなった手を少しの間見てから、ぎゅっと握った。そしてそのまま私の手を引っ張って歩き出す。

「ちょ……っ、宮本君……？」

「片方だけだけど」

振り向いて、にっと笑う。

「あったかいでしょ？」

そんな風に言われたら何も言えなくなってしまう。俯いて黙りこんでしまった私を見て、宮本君が小さく笑った。

「それから、言いたいことはちゃんと言ってね。遠慮なんてしないで。俺はちゃんと聞くから」

彼の言葉に、はっと顔を上げる。

「ちゃんと、聞くから」

念を押すように、宮本君はもう一度強く言った。

自分の思いを打ち明けるのが怖かった。誰も私の話なんて聞いてくれないから。誰にも私の声は届かないから。話す人なんていなかった。話す必要はなかった。話せなかった。話して、もしそれが間違っていたら、嫌われたら……。同じことを繰り返してしまうのが怖かった。みんなと違うことは言えなかった。

そうして誰とも会話できずに、自分の殻に閉じこもっていた。誰にも嫌われることなく。誰にも好かれることなく。

どうして分かったのだろうと思う。宮本君は、本当に不思議だ。

「本当に……、聞いてくれる？」

「うん」

こみ上げる熱い想いを目を擦って拭いながら、私は宮本君に疑問をぶつける。

「どうして私なんかを待ってくれてるの？　どうして一緒に帰ってくれるの？　まだ、次のトモダチはできないの？　私なんかといて、楽しいの？」

「いっぱいあるんだね」

んー、と考える様な声を出してから、ゆっくりと宮本君が言う。

「相川さんといると楽しいよ。本当に好きなことを話せて、無理することがない。一緒に帰るのは、家が近いってことと、さっきの一緒にいると楽しいってのと。それからただ単に一緒にいたいからかな。友達はね、まだできないよ。一緒に帰ろうと思うのは、相川さんだけ」

私の手を引いて、私の少し前に立つ宮本君は、白い息を吐いてまたゆっくりと語りだす。

「前に言ったこと覚えてる？　友達と言えるかどうか分からないって。まだ、ずっとそんな感じなんだ。俺が本音を見せてないから。――俺はね、それなりに人付き合いも得意だし、人間だからもちろん言葉も話せる。誰かに合わせて話を作ることだってできる。表情だって好きに作れるし、表面上だけならみんな友達だろうね。だから、尾畑も、瀬野も、早川も、友達だっていえばみんな友達。でも俺はそう思ってない。あくまで、俺がそう演じてるだけだから。話を合わせて、みんなの理想の『宮本』を作ってるだけ。まあ、そこまで大げさなものでもないんだけど」

どことなく急ぎ足で歩く彼の表情は、彼自身の背中に隠されて窺えない。でも、おそらくいつものように笑っているのだろうと思った。

「私、は？」

もう一つ、疑問を述べてみる。

「相川さんは違うよ。いつも本音。今話したことだって本当の俺のものだし、本が好きだとか、そんなことも」

「どうして……っ」

どうして私が？　どうして私にだけ、そんな。こんな私に。私なんかを。

言いかけた言葉を、すべて飲み込む。大きく息を吐いてから、もう一度聞きなおした。

「なんで、私だけ？」

「んー、俺と似てたからかな」

「似てる？」

私と宮本君が？　どこが？

私がまた訊くと、訊きたい事がいっぱいあるんだね、と小さく笑って、宮本君が白い息を吐く。

「本当の自分を、隠してるところとか？　隠し方に違いはあるけれど、俺も相川さんも自分を隠して生活してるでしょ？　相川さんは黙り込んで。俺は笑顔や言葉の裏に隠して。あと、好きな本も一緒。……初めてね、嘘をつかなくてもいいかなって思ったんだ。俺少し変わってるからさ。相川さんならそんな俺も認めてくれるかなって思った」

宮本君が変わってる？　誰がそんなことを言ったのだろう。彼は普通の男の子なのに。

でも、それは私が知っているだけの宮本君で、彼にはまだ私の知らない部分があるのかもしれない。だから、この質問を口に出すのはやめておいた。彼の言っていることが本当ならば、いつか私にもわかることだろう。

「だからさ、俺も相川さんの全部を受け止めるからさ、心にため込

んでた気持ち、全部言ってくれていいからね。質問とか疑問とかだけじゃなくて、言いたいこと全部。あ、もちろん言いたくなかったらいいんだけど」

「……うん。言いたいことはなるだけ言う。言いたくないことは黙ってる。宮本君だけには。約束する」

うつむきながらそう答えると、彼が優しく笑う声が聞こえた。ありがとう、とつないでないほうの手で頭をポンとたたかれる。ありがとうと言いたいのはこっちのほうだ。初めて居場所ができた。ありがとう。でも、なんだか照れくさくて言えなかった。さっき約束したばかりなのに。

「あ、そうだ、それから」

宮本君が何か思いついたように空を見る。今日は満月で、明かりの少ないこの住宅街ではなんだか月が眩しく見えた。

「『私なんか』って言うのはやめてくれないかな。相川さんは十分素敵だよ」

宮本君のその言葉に、私は赤くなって小さくうん、と答えるしかできなかった。

好きな人ができました。その人はとても素敵です。私にはもったいないくらいです。その人は私を受けとめてくれます。私も彼を受けとめてあげたいです。

「人間って馬鹿だよな」

揺られる電車の中、唐突に宮本君が小さな声で言った。

ちょうど、開発途中のビルの前を電車が通り過ぎた時だった。

最近は登校する時も一緒になる。私が家を出ると、少し先で待ってくれてたり、もしくは家の前に立ってたりする。

私は宮本君の顔を横から見ることで、彼に話の続きを促した。

「環境破壊を止めようだとかエコ推進とかいろいろ言ってるくせに、車の数はどんどん増えるし、ビル建設も止めない。道路だって新しいものを作っていく。そのたびに人間以外の生物の住処が失われていくのに。どんな動物だって縄張りを守って、違う種族の縄張りには侵入しないのに、人間だけがそれを犯す。いっそのこと人間がいなくなればこの世界は平和なのに」

宮本君は時折、こんな風に人間を責めるような、自虐的なことを言う。それは間違ってなんかいないことで、確かに正しいことで、誰もが見逃していること。思えば、最初の自己紹介も、あれは彼の本音だったのだろう。宮本君が言った『変わっている』場所は、こういうところなのかもしれない。

「この世界には人間だけがいればいいと思ってるのかな。馬鹿だよね。どれだけ呼びかけても、どれだけ国が動かそうとしても、誰もそれに従おうとしない。言葉だけの見せかけで、結局自分に都合いいようにしか動かないんだ。それは俺も一緒。学校まで行くのにも、環境を大切にするために、なんてわざわざ自転車に乗ったりしない。命を大切にするためなんて肉を食べないわけでもない。命がもったいない、なんて店の品物を買い占めたりもしない。ゴミだって出す。洗剤も使う。なんで人間が一番偉いだなんて思ってるんだろ。ただ、

知能が高いってだけで。高いなんて言ってもたかが知れてるし、むしろそんなものがあったって自然に対抗できるわけがない。生身で森に放り出されたら飢え死にするか、動物に殺されてしまうか、そんなところで。蚤ですら自分の身長の何百倍も跳べるんだよ？　人間なんて宇宙に組み込まれたほんのちっぽけな生命体にすぎないのに。みんな、人間も動物で、学名が付いていることなんて忘れてしまってるんだろうね」

私はそれをただ黙って聞く。そんな時の彼はたいてい笑顔で、でもどこか辛そうで、どこかですべてを諦めているようでもある。なんだか見ていると哀しくなってくるような……。

「ああ、ごめん。こんな話して。つまんなかった？」

私はゆるゆると首を振る。

「ううん。すごいなって思ってただけ。誰もそんなこと考えないから。ただ、月日が流れるのを待つだけで」

「すごい、か……」

宮本君が天井を見上げてため息をつく。

「そんなこと言われたの初めてだよ。やっぱり、相川さんに話せてよかった」

ふ、と表情を緩めて、小さく笑う。宮本君のこんな笑顔が私は好きだなあと思う。

でも、それと同時にやっぱり胸の奥がときどき痛くなる。彼の笑顔に嘘がないからこそ、どうしてそんなに哀しそうに笑うのかと聞きたくなる。けれど、それは訊いてはいけない気がして、訊きたく

なくて、私も同じように彼に向けて笑った。

「相川さん、ちょっといい？」

授業もＨＲも終わり、私がいつものように図書室に向かおうと思っていた時のことだ。クラスの女子生徒数人に呼びかけられた。よく宮本君の周りにたかって笑い合ってる人達。

普段、何か頼み事や掃除などのグループを作らなければならない時にしか会話しない彼女たちは、今日はそれらとは別の何か明確な目的があるようだった。私にはその内容が何となくわかっていたので、頷いて大人しく彼女たちのあとをついていく。

連れてこられた場所は人気の少ない廊下。図書室にほど近いここに近寄る人はほとんどいない。図書室への通り道でもないので、私も通ったことがない。なんてベタなことをするんだろうと内心ため息つきながら私は彼女たちに向かい合った。

「……なに」

「相川さんって、宮本と付き合ってるって本当？」

やっぱり。本当にこんなことをする人がいるんだなとまたひっそりとため息をつく。

「二人が一緒に登下校してるって、見た人が何人もいるだけど」

「別に……付き合ってるわけじゃない……」

「だよね。あんたみたいな暗い人と宮本が付き合うわけないか」

「じゃあ、なんで一緒に帰ってんの？　はっきり言って、迷惑なんですけど」

本当にはっきり言うなあ……。私と宮本君が一緒に帰るだけでどうしてあなたたちに迷惑がかかるのか。話す時間の多さではあなたたちのほうが多いだろうに。

「住んでる地域が一緒だから……、電車がよく同じになるの。本数少ないから、帰りも同じくらいで、学校を出る時よく会うだけ。別れるのもなんだからって……」

「それを毎日毎日？　アンタ宮本狙ってんじゃないの？」

「そーそー。待ち伏せしてたりとかするわけ？」

「うっわ、キモ！　身分考えろよ。鏡とか見たことあんの？」

「真樹それはねーって」

「ひっど！」

酷いなんて言いながら笑ってる自分はどうなのだろう。目の前で私の存在を無視しながら笑い続ける彼女たちに向かって思う。

実際に待っているのは宮本君のほうなわけで、私は待ち伏せした記憶なんてこれっぽっちもないし。鏡だったら毎日嫌というほど見てるし。身分って、私とあなたたちの間に、どれだけの差があるのか。宮本君と私は身分が違うというのだろうか。どう考えても、この公立高校に通ってる時点でただの平民だろう。狙ってるのはあなたたちなんでしょ？

すべて言えないまま飲み込んでしまう。私はやっぱり弱いままで、言ってしまうことで嫌われるのが嫌だった。

「相川さん？」

角の向こうから、聞きなれた声が聞こえた。宮本君だ。

私は一度大きく息を吸い込んで、肺の中に溜める。一つだけ、言いたかった。宮本君が来るなら、少しくらい何か言っても大丈夫だと思った。少しくらい何か言わなきゃと思った。

「あなたたちにとって私が平民以下の存在なら、宮本君が私と付き合うわけないって思ってるなら、こんなことする必要ないでしょう。私なんかあり得ないんだから」

こんなことする時間があれば宮本君を探し出して一緒にいればいいのだ。自分から一緒に帰ろうと誘えばいいのだ。宮本君は断ろうとはしないはずだから。

私の急な発言に彼女たちは驚いたようだ。みんな一様に目を丸くしている。

「……何してんの？」

今度はもっとはっきりと宮本君の声が聞こえた。いつもよりいくらか冷たく感じる声だった。振り返ると、西日を背にした宮村君が立っていた。逆光で顔はよく見えないけれど、黎い瞳が冷たく光っている気がする。

「み……、宮本」

女子たちが、その姿を見て少したじろぐ。つかつかと足早に近寄ってくる宮本君に向かって、私は言う。

「なんでもないの。少し話をしてただけ」

「こんなところで？」

「うん」

「俺には言えないこと？」

「うん」

にっこりと微笑みかければ、宮本君は諦めたように大きくため息

をついて、頭をガシガシと掻いた。それから彼女たちのほうを見る。

「俺について何か言いたいことあるなら俺に言って。相川さんじゃ答えられないこともあると思うから」

「……っなんで？」

宮本君の言葉に、一人の女子が堪えきれなくなったのか声を上げた。

「なんでその子ばっか……。そんなつまんない子！」

宮本君の目が、また細まる。ああ、せっかく終わらせようと思っていたのに。

「宮本く……」

もう行こう、と促そうと思ったけれど、彼の名を呼び終わる前に手で遮られた。一瞬微笑みかけられて、何も言えなくなってしまう。

「相川さんはつまらない子じゃないよ。ちゃんと自分の意見を持ってる。君たちが聞こうとしないだけ」

私の横に立つ宮本君の顔は見上げないと分からなくて。なんだか見上げることが怖くて、彼がどんな顔をしているのか確かめることはできなかった。ただ、目の前に立つ女子たちの雰囲気から、普段の宮本君とは違うのだろう、とは思った。

「俺にとっては君たちのほうがつまんないよ。相手の本質を見極めようともしないで、いつも自分が正しいと思ってる。自分に都合の悪いことは無視。見ないふりして、通り過ぎる。ただ周りにいる人

が多いからって自分が正しいって顔をする。異なる意見は認めない。はじき出す。俺もそうだからね、同族嫌悪ってやつ？」

普段の宮本君からは信じられないような、冷めた笑い声をこぼす。私は宮本君のそでをぎゅっと握って、もうやめて、と言いそうになった。これ以上、宮本君の辛そうな声は聞きたくない。

「……とにかく、俺が相川さんと居ようと居まいと、君たちには関係ないから」

その思いが伝わったのかどうか、宮本君はまだ何か言いたそうだったが、それだけ言うと踵を返した。私はそれに、少し躊躇いながらも付いて行く。というより、手を引っ張られてついて行く他なかった。

図書室の前を通り過ぎ、どうやらこのまま帰るつもりらしかった。

「あの……、宮本君。いいの？」

「何が」

少しの怒気を含んだ宮本君の声が聞こえる。一瞬握った手の力が強まって、宮本君がはあっと大きく息をついた。階段の踊り場で、急に立ち止まったかと思うと振り返る。

「ごめん。相川さんに怒ってるわけじゃない。ただちょっとムカついてて……。ごめん。八つ当たり」

宮本君が項垂れて前髪をぐしゃっと掻き上げる。

その様子に私はあわててかぶりを振った。

「大丈夫。いつもと様子が違ったから、吃驚してただけ。あと……、

ちょっと心配してた……かな」

苦笑いをする私に、宮本君は申し訳なさそうに、眉を寄せる。

「ごめん」

「うん」

「ほんとごめん」

「謝らなくて大丈夫だよ」

下を向いてる彼の頭をポンポンと叩く。平気、大丈夫、と声をかけると、ようやく少しだけ微笑んだ。

「良かったの？」

私はもう一度同じ質問をする。

「うん。もともとあんな風にこそこそやるような人と付き合うつもりないし。同族嫌悪も本当だから。自分が嫌な奴、駄目な奴だってわかってるから、余計に同じような人が許せないんだ。お前もかって」

「……」

自分を責めるような言い方をする彼に、私は何も言えなかった。

「相川さんを傷つけたしね。別にどう思われようといいよ」

さらり。自然にそう口にした彼に、私の顔はかあっと熱くなる。そんなこと言われたら、自惚れてしまう。まるで、私以外はどうでもいい……、みたいな。いくらなんでも自惚れすぎだとは思うけど。

「あの……、手……」

いまだに繋がれたままの手を指して言う。正直、校内でこのままというのは恥ずかしかった。

宮本君がごめん、と呟いて手をゆっくりと離す。離されたとたん冷たい外気にさらされて、少しだけ名残惜しかった。

西日が差しこむ電車の中。それのせいで、背中だけが妙に熱い。

あれから私たちは何も話すことなく駅につき、今電車に揺られている。

何となく気まずい空気の中、私は決心をして口を開いた。

「宮本君、さっきのことだけど……」

「同族嫌悪とか、その辺り？」

私が言い終わる前に、宮本君が私の考えを読んでいたかのように前を見つめたまま言った。

私は少しの驚きを顔に滲ませながらゆっくりと頷く。

「綾崎さんたちに言ってたことも、あるんだけど」

「うん」

「私もね。皆と同じだから。人と外れるのが怖いから、いつも大多数のほうに流れてって。みんな、そうなんだと思う。もちろん、違う人もいるだろうし、そんな人がいたらすごいなって思うけど……。だから、みんなを責めちゃダメだよ」

「うん」

「だからね。宮本君も自分を責めないで。宮本君だってすごいんだよ。自分だけの意見を持ってて、確かにみんなの前では嘘をついて、

隠してるかもしれないけど……。ちゃんと私には話してくれた。私を認めてくれたんだよ」
「うん」
「だから、あんな風に言わないで。冷たい声で、自分を責めたりしないで」
「うん」

言っていて、声が震えだす。目の前がにじんで、あ、泣きそうだ。って思った。
黙り込んでしまった私にかわって、宮本君がゆっくりと言葉を紡ぎだした。

「……相川さんは、違うんだ。変わってる。あっ、変だ、っていう意味じゃなくてね。良い意味でみんなと違ってる。……誰かの意見を撥ね退けたりしなくて……、だけどちゃんと自分の意見を持ってて。なんて言うんだろう……。俺はね、相川さんに救われたんだ」

ゆっくり、ゆっくりと、時々何かを考えるように黙り込んで。ゆっくりと伝えてくる。

「この間言った、人間って馬鹿だって話、覚えてる？」
「え……？うん」
「あの時は他の生物や地球に対する人間の話をしたけど、それだけじゃないんだよね。人間は、人間も虐げる。少しでも意見が合わなかったり、違っていたり、気に入らなかったり。それだけで平気で人を傷つける。意見を認めようともせずにね。それは小さいものだと虐めだったり、大きくなったら戦争だったりする。おかしくないか？たった数人の意見の食い違いで、まったく関係のない人たちの命が失われていく。何にも悪くないのに。そして、いつも正しいのは勝ったほう。力の強いほう。大多数の支持者、賛成者を得たほう

なんだ。何か悪いことをしても、『皆してるから』。どんなに悪いことをしても皆がやっていれば許される。『赤信号みんなで渡れば怖くない』ってね。笑っちゃうだろ。そんな時は大抵、普通のことをしてるやつが変な目で見られるんだ。なんだよあれ、いい子ぶってるつもりか、って。この国や多くの他の国は、みんな『平等』って言葉を叫んでる。平等って、みんなが同じように暮らせる世界ってことだろ？皆が同じように生きて、自分だけの意見を持って。そんなの嘘だ。いつだって自分の意見で行動しようと思えば誰かに止められる。『どうしてあなたは皆と協力できないの』って。どこが平等だよ。大多数派の人間に従わなきゃダメなんじゃないか」

私は隣で聞いているだけで、何も言うことができない。顔をあげて彼の顔をのぞくことすらできなかった。

だんだんと悲痛さが増していく宮本君の声に、耳を塞ぎたくなる。だけど、聞かなきゃならない。私はただ、拳をぎゅっと握りしめていた。

「自分たちの都合のいいように動いて、邪魔なものは省いて、撥ね退けて。自分たちでこの世界は回ってるって思いこんで。従わないモノは力を使って消し去っていく。害をなすものだと認めたら動物だろうと人間だろうと叩きつぶす。少しでも違うモノは……認めようとしないんだ。受け入れない。こんなこと続けてたらいつか自滅する。多数派で、少数派を叩き潰して、いつか世界には人間がいなくなってしまうだろう。そうなれば良いなんてことも考えたことがある」

「宮本、君？」

自らを嘲笑うような宮本君に、私は胸を締め付けられるようで、思わず呼びかけた。私の様子に、宮本君が微苦笑する。

「大丈夫。そんな物騒なこと、今は思ってないよ」

そう言う彼の顔を見て、本当だろうか、と私は思う。宮本君の瞳はどこまでも黒くて、深く、深く、吸い込まれるような闇の色をしていて。すべてを諦めているような瞳で、突然怖くなった。

「だからね、俺は相川さんに出会えて、本当に良かったと思うんだ」

「え？」

困惑する私を見て、ふふっと恥ずかしそうに宮本君が笑う。

「相川さんは初めて俺を認めてくれた。受け入れてくれた。こんな人もちゃんといるんだって思えた。だからね、人類なんて滅んでしまえなんて思ってないよ」

「それは宮本君も同じだよ。私の話を聞いてくれた」

「うん。だから、俺にとって相川さんは他の皆とは違うんだ。良い意味でね」

にっこりといつものように優しく微笑む。

けれど、彼は気づいているのだろうか。今、自分がとても悲痛な表情をしていることに。笑いながら泣いていることに。笑いながら叫んでいることに。

きっと、今でも人間なんていらないと思っているのだろう。彼はきっとすべてのものを愛しているのだ。人間のせいでそれが失われることが許せないのだ。けれどそれは自分の力ではどうしようもないことで、どうにもならないことを知っているから諦めているのだろう。——私に会えたことは、彼にとってほんの少しの幸福にすぎないのだ。どうせいつか消えるものだと。

無性に悲しくなった。涙がまた、あふれそうになる。——泣いちゃダメ。そう思って、握りしめた拳をさらに強く握った、爪が食い

込んで痛い。けれど、彼の心はもっと傷ついているに違いない。

「あ、もう次だね。――長く話しすぎた、ごめん」

車内のアナウンスを聞いて宮本君が天井を見る。私はその言葉にゆるゆるとかぶりを振って大丈夫、と答えた。何が大丈夫か、自分でも分からなかった。

好きな人ができました。その人に触れるとどうしようもなく愛しく思います。けれど、その人はいつも哀しそうです。その人は酷く脆くて、いつか、すぐに壊れてしまいそうです。彼が彼のままでいたならば、彼はいつか消え去ってしまうでしょう。この世は彼にとって危険でいっぱいなのです。私は彼を守りたい。いつも守られている気がするから、これからは私も彼を守ってあげたいと思います。全てを懸けて。誰でもない自分自身に誓います。私は、彼を守ります。

駅を出て、街灯の少ない街を歩く。駅前とはいっても、この辺りはすごく淋しい。

住宅街に入るころに、駅を出てからいつの間にか繋がれていた手を離して、私は立ち止った。「相川さん？」と宮本君が立ち止まってこちらを振り向く。

「あの、ね。笑わないで聞いててね」

自分なりの、精一杯の大声で宮本君に言う。

すうっと大きく息を吸い込んだ。ずっと考えていたこと。宮本君にぶつけてみる。

「始めまして！　……、じゃないけど、私を紹介します。私の名前は相川麻衣です。霊長類人科に属してます、ホモサピエンスの一人、人間です。知能は高く言語も操れます。運動神経はあまりありません。ですが知能を使って道具を使って生態系の頂点に立っています。私は人間です。酷いことも沢山しました。知らずに色んな生態系を壊し続けてます。気づくのが少し遅かったかもしれません。このまま全てを壊し続けて、潰し続けて、いつか私たちも壊れてしまうのでしょう。でも」

驚きこちらを見ている宮本君に笑いかけ、さらに声を張り上げる。

「でも！　私はあなたと出会えて、あなたと一緒に居れて、今とても幸せです。人間が人間であって、私が人間でよかったと思ってます。これからもずっとこのままでいたいです。そのためにあなたとずっと頑張っていきたいです。これからも、これから先も、そのずっと先も……！」

ぼろっと大粒の涙が私の瞳から零れ落ちた。止まらないそれを拭い、まっすぐに宮本君を見つめる。彼は驚きのあと、漆黒の瞳を柔らかく細めて微笑んだ。私も笑って、足を出す。彼の隣に立って、これからも歩いていくために。足が速まる。駆け出す。彼が笑って待っている。私は彼の手を握った。

（後書き）

少し前に友人に頼まれ描いた作品です。
少し前なのにかかわらず文章が拙すぎて泣けますが、修正などはほとんどせずに載せました。（ただめんどかったdゲフン！）
もうひとつ、アナザーストーリー的なものを考えているので、それもいつか載せれたらなと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3404g/

Human Being

2010年10月28日04時30分発行